

インド政治の過去と現在－支配の正統性をめぐって



2018年5月19日土曜日に、第2回日本南アジア学会30周年記念シンポジウムを、東京大学グローバル地域研究機構南アジア研究センターの共催のもと、東京大学駒場キャンパス18号館ホールにて開催した。シンポジウムの共通のテーマは「インド政治の過去と現在－支配の正統性をめぐって」である。当日のプログラムはつぎのとおりである。

日本南アジア学会 30 周年記念シンポジウム 「インド政治の過去と現在－支配の正統性をめぐって」

2018年5月19日土曜日、13:30-18:00

司会：小西公大（東京学芸大学准教授）

タイムキーパー：関戸一平（人間文化研究機構研究員/東京大学特任研究員）

- 13:30-13:40 挨拶と趣旨説明 水島司（東京大学名誉教授）、田辺明生（東京大学教授）
- 13:40-14:05 小茄子川歩（人間文化研究機構研究員/京都大学客員准教授）「インダス文明：「国家」なき文明社会の統合原理」
- 14:05-14:30 藤井正人（京都大学教授）「ヴェーダ王権儀礼における王の正統性の確保」
- 14:30-14:55 三田昌彦（名古屋大学助教）「ラージプートの歴史叙述とムスリム支配：多元的文化世界における正統性の模索」
- 14:55-15:05 休憩

- 15:05-15:30 間永次郎（東京大学特別研究員 PD）「ガーンディーにとっての正統的統治とは何か：独立運動期における民族統合」
- 15:30-15:55 近藤則夫（アジア経済研究所南アジア研究グループ研究員）「現代インド政治と支配の正統性」
- 15:55-16:20 内川秀二（専修大学教授）「経済成長と社会政策：政権の正統化と貧困対策」
- 16:20-16:40 休憩（質問票回収）
- 16:40-16:50 太田信宏（東京外国語大学准教授）コメント
- 16:50-17:00 田辺明生（東京大学教授）コメント
- 17:00-17:10 加藤篤史（早稲田大学教授）コメント
- 17:10-18:00 討論・質疑応答

今回のシンポの趣旨はつぎのとおりである。

インド政治の過去と現在をめぐって、権力者が支配の正統性(レジティマシー)をどのように確保しようとしてきたかについて学際的に検討する。インド政治のありかたを検討するにあたって支配の正統性に着目することは、インドにおける権力者と被支配者、国家と社会、都市と村落の関係のありかたを考察し、インド的な政治システムの特徴を明らかにするにあたって有用であろう。

安定した支配関係が成立するためには、単に物理的な力によって被支配者を服従させるのではなく、政治的支配が正統なものであると被支配者側に認められることが必要である。そのため権力者は常に自らの支配の正統性を確保しようと努めてきた。ただしこの正統性は、本質的に被支配者の受容を条件として成り立つものであり、権力者が正統性を確保するためには、被支配者側がいかなる権力を正統なものであると認識しているかを考慮する必要がある。支配の正統性の源泉は、文化・社会・宗教的な権威であったり、近代では合法性のみならず社会保障や社会経済発展であったりする。ところが、多様性を特徴とするインド社会においては、被支配者たちも多様であり、何が権威を生むのか、誰のいかなる福祉保障や社会経済発展が求められるのかについての見解はさまざまである。

こうしたなかでインドの権力者は多様な被支配者を相手にいかなるかたちで正統性を確保しようとしてきたのか。そこでは被支配者側の既存の価値や要求を支配者側がとりいれる下からの過程と同時に、権力者側が被支配者側の支持と受容を新たに構築するような上からの過程もあったものと想定される。つまり正統性の観点からみれば、インド政治は、社会の多様な価値と要求を反映しつつ、それらを創意的に統合して全体に受容されるような権力・権威のかたちをつくりだそうとするダイナミックな営みであった（ある）ということができるかもしれない。こうした観点から、権力者と被支配者、国家と社会、都市と村落の関係のありかたを分析することをつうじて、インド政治が正統性をづくりだそうとしてきた長期的な歴史とその現代的な現れを理解し、その構造的な特徴を明らかにすることが



水島司 先生



田辺明生 先生

できれば、地域研究の視点からインド政治を論じるうえでのひとつの重要な成果となるだろう。

本シンポジウムでは、インダス文明、古代ヒンドゥー王権、中近世イスラーム帝国、植民地期の民族運動、そして現代インド政治について、考古学、インド学、歴史学、人類学、経済学、政治学という複数のディシプリンの立場から検討する。これをつうじて、インド的な政治システムの特徴を長期的・学際的な視点から明らかにすることができれば幸いである。

シンポにおける報告およびコメントの概要はつぎのとおりである。

1. インダス文明：「国家」なき文明社会の統合原理（小茄子川歩）

インダス文明とは、紀元前 2600 年頃に現在のパキスタンおよび北西インドを中心とする地域に成立した南アジア最古の広域統合社会である。都市やインダス式印章、おもりなどに代表される当文明社会の「統一性」、いわゆるハラッパー文化の分布範囲は、南北 1,500km、東西 1,800km をはかる。その広がり、当文明社会の版図が、西アジアのメソポタミア文明やエジプト文明と比較しても広大であることを示唆している。

さてインダス文明社会は、他の古代文明社会とはおおきく異なるつぎのような側面をもつ。王や一つの明確な中心が存在しないこと、社会全体にいきわたるような強力な宗教が存在しないこと、そして暴力・軍隊の存在を認めることができないことである。いかえるならば、西アジア型の都市国家、あるいは中央集権的な「国家」ではなかったことが明らかなのだ。

このような場合、西アジア型の社会のあり方をひきあいだし検討するという方法だけでは、南アジア型の社会のあり方を正確に理解することは不可能であると思う。われわれの歴史認識は、意図せずとも、西アジア型の、あるいは教科書通りの都市や国家、そして文明のあり方にひきずられる傾向にある。しかしながら、南アジアに、西アジア型の社会のあり方を積極的に求める必要性はない。

インダス文明の中心＝都市（「上」）は、各地域に既存のものとして存在していた多層な「下」（周縁＝村落）からの多様な文化要素を統合・再構造化するために、「下」が主体となるかたちで創出されたリージョナルな中心であり、市場的・文化的・社会的なまとまりにとどまり続けた。そして各地域に点在するリージョナルな中心＝都市は、ほぼ同位レベルを維持したままに共生し、多中心の広域ネットワークを形成するにいたった。さきに述べたインダス文明の「統一性」＝ハラッパー文化は、この多中心の広域ネットワーク内でのみ共有されているとあってよい。つまりこの多中心の広域ネットワークが活性化したあとにおいても、「統一性」が「下」まで浸透することはなく、「下」の「多様性」＝多様な地域文化・伝統はそのまま保持されつづけているのである。このような「下」からの構造化と「上」からの構造化が均衡状態にあるかのような社会のあり方をインダス文明とよぶ。

インダス文明の権力者と非支配者、そして政治システムのあり方は明らかではないが、その支配の正統性に言及するのであれば、それは多層かつ多様な「下」からの価値と要求を反映するかたちで創りだされた多中心の広域ネットワークによって確保されていたものと考えられる。多様な社会をまとめるネットワークそれ自体が統合の正統性を維持していたのであり、超越的権威は



小茄子川歩 先生

政治的にも、宗教的にも存在しない。こうした点から考えてみると、この南アジア最古の正統性維持のメカニズムは、南アジアに存在する多様な社会が創りだした、超越的権威の出現を抑制するための装置としての位置づけも可能なのかもしれない。

このような社会のあり方は、西アジア型の社会のあり方にもとづく都市や国家、そして文明というような既存の概念では説明しきれない。インドを特徴づける多様性社会における統合の正統性維持の一つのパターン、あるいはその基層を、ここに見いだすことが可能であると主張したい。

2. ヴェーダ王権儀礼における王の正統性の確保（藤井正人）

前2千年紀後半から約1000年にわたるヴェーダ時代は、リグ・ヴェーダが作られた前期ヴェーダ時代（前1000年頃まで）と、それ以外のヴェーダの主要部分が成立した後期ヴェーダ時代に分けられる。ヤジュル・ヴェーダに大規模な王権儀礼の形成がみられることから、後期ヴェーダ時代初期に、王による支配体制が確立されたと想定できる。当時の統治システムは明らかではないが、王権儀礼を分析することによって、王権の特徴をさぐることは可能である。報告では、この時代に王がどのように儀礼において正統性を確保したかを、王権儀礼を含むヴェーダ祭式におけるブラフマン祭官（主席祭官）の役割と、王即位式（ラージャスーヤ）における王性の変化をもとに考察した。



藤井正人 先生

ブラフマン祭官の原語は、中性のブラフマン (*brāhman*) 「聖なる言葉 [の力]」をアクセントの位置を変えて男性語化した語 (*brāhmān*) で、「ブラフマンに関わる (体現する) 者」を意味している。古くは祭官、次いでブラフマン祭官、後にはブラフマン神 (梵天) がこの同じ語で表される。バラモン (ブラーフマナ) という語は、このブラフマン (男性) からの派生語「ブラフマンに関わる (体現する) 者」に「階層の者」である。ヴェーダ祭式においてブラフマン祭官は、他の祭官たちから離れて、祭主の傍らでいわば祭主の半身となって祭式に臨んでいる。王が祭主となる王権儀礼などでは、多くの場合、王のプローヒタ (王付司祭) がブラフマン祭官の職務を担当したと思われる。注目すべきは、即位式において、王座に座った王と祭官たちが互いに「ブラフマン (男性)」と呼びかけあっていることである。またある祭儀書では、王は即位式の開始時にバラモンとなり、終了時にクシャトリヤに戻ると説かれ、即位式の最後に行われる飲酒儀礼 (サウトラーマニー祭) は、王がクシャトリヤに戻るためにクシャトリヤの象徴である酒を体内に取り込む特別な儀式とみなされている。

これらは、王がプローヒタないしブラフマン祭官を媒介として、あるいは儀礼的にバラモンとなることによって、儀礼上の正統性 (聖性) を確保した上で、支配権を確立・宣揚するための儀式を行っていたことを意味している。この時代、王権は飛躍的に拡大しつつあったが、支配の正統性のために祭官の聖性を必要としている点で、後世のたとえば太陽と同一視される王などのような、それ自体が単独で神聖視される王権とは異なっている。王が正統性の確保のために祭官の聖性を必要とする背景として、ヴェーダ期のインドでは、王権と司祭権は分離しつつあったが、いまだ完全には分離しておらず、王は司祭権をプローヒタないしブラフマン祭官に委託する形で保持していたことが考えられる。このことは、また、バラモンが体現しているとされる聖性自体

も、バラモンによって独占的に所有されるものではなく、儀礼上とはいえ、バラモン以外へ拡大しないし転位可能なものと理解されていたことも示唆している。

3. ラージプートの歴史叙述とムスリム支配：多元的文化世界における正統性の模索（三田昌彦）

ラージプートなど南アジア中世の在地支配者は、ペルシア・イスラーム文化の帝国支配が進行すると、かつてのようにサンスクリット神話に自己の系譜を接続し正統クシャトリヤを誇ることで自己の支配の正統性を主張するだけでは済まなくなる。本報告は、ほぼ全てのラージプート王家がムガル帝国官僚の一員となり、ヴァナキュラーな言語で自己の歴史を記す17世紀前半に、改宗ラージプート・キャームカーニーがいかにかに自己を正統化し、他のラージプートがいかに対応するかを見ることで、文化的に多様なバックグラウンドの支配集団内における正統性承認のプロセスを考察することにある。



三田昌彦 先生

ラージャスターン北部の土豪に過ぎなかったキャームカーニーは、ムガル帝国官僚になると急速にムガル宮廷内での地位を上昇させ、その高い地位に見合う王家の歴史として『キャーム・カーン・ラーサー』を編纂した。そこではキャームカーニーの始祖は、名門ラージプート・チャウハーンの流れを汲み、トゥグルク朝スルターンのもとで改宗したスルターン直属の家臣とされた。また、その歴史書全般にわたってチャウハーン出自であることが繰り返し強調される一方で、そのチャウハーンの歴史はイスラームの人類史の系譜にも接続され、加えてデリー・スルターン、ラージプート王家両者との婚姻関係を強調するというように、彼らのアイデンティティは名門ラージプートとムスリム貴族とのハイブリッドだと主張された。

こうしたキャームカーニーの主張に対して、彼らの拠点に隣接するいわば政治的ライバルでもあるラトール側の記した歴史書『ナインシーリー・キヤート』では、キャームカーニーの起源はローディー朝スルターンの一武将に拾われたチャウハーンの息子だとされ、最後に、彼らはその武将の奴隷・下僕（*golau*）となったために汚れたとする韻文を引用して終わっており（しかし改宗のプロセスには言及しない）、キャームカーニーの社会的威信が貶められている。

このようにキャームカーニーの王家としての正統性とその歴史について互いに相反する見解が提示されているにもかかわらず、しかしチャウハーン出自という彼らの血統の真正自体は両者の間ですでに合意されている。近年の研究でしばしば指摘されるように、ムガル時代にラージプート・アイデンティティの明確化や序列化が進行するのは確かだが、ただしそれはリジッドな集団形成ではない。合意のとれない異なる歴史叙述を提示し合う中でチャウハーンであることが確認されるこの事例のように、それは互いに敵対的・競合的な序列化のプロセスの中で再編成が繰り返される、かなり流動的な集団形成である。

多様な出自の集団をラージプートと認定するパターンはムスリム統治以前にも存在したが、その正統性は一元的にサンスクリット文化への同化によって認定されていた。しかし、13世紀以降サンスクリット文化に決して同化しないムスリム帝国が現れ、ムガル期にはムガル帝国特有のコスモポリタンな宮廷文化の中でムスリム政治エリートとの交流が否応なく進行すると、彼らの正統化のプロセスはサンスクリット文化内では完結し得ず、ムスリムとの交流やイスラーム文化の

影響下でラージプート集団を再編し、その集団としての正統性を模索することになっていく。改宗ラージプートとの流動的で柔軟な集団形成のプロセスは、その典型であると言える。

4. ガンディーにとっての正統的統治とは何か：独立運動期における民族統合（間永次郎）

しばしばガンディーが率いた反英独立運動（1920-1947）は、それまで民族政治に無関心であったインドの農民を取り込んだ植民地史上初の全国規模のナショナリズム運動として高く賞賛される。だが、イギリスの植民地支配に代替すべきとする「正統的な」インド統治をめぐる理解のあり方は、多くの場合、ガンディーと農民の間で著しく異なっていた。本報告では、ガンディー自身が独立運動の理想として掲げた「インドの自治（ヒンド・スワラージ）」と、農民たちが思い描いていた「ガンディー王国（ガンディー・ラージ）」の理想とがいかにすれ違い交わる中で独立運動が展開していたのかを論じた。



間永次郎 先生

ガンディーの自治の理想とは、（１）非暴力的手段を用いてイギリスの制度的支配から自由になること（国家の自治、独立の達成）、（２）ガンディー自身を含めた国民一人一人が物質的・身体的欲望を克服すること（自己の統治、統制の達成）を意味した。この点で、ガンディーは近代社会の文明の利器を持たない農村地域の人々が、独立運動の主要な参加主体となることは最も適したことであったと考えていた。

一方で、マス・メディアのない農村地域では、ガンディーの理念は専ら噂によって伝搬され、それはいつしか神話化されたガンディー王国の理想に変貌していた。さらに、ガンディーの考える一義的な「農民（ライヤト）」理解と異なり、インドの農民の現実には、地域毎のカースト・部族・宗教によって複雑に分割され、経済的・社会的地位も様々であった。ガンディー王国の理想はそれぞれの農民の自己利害に結びつき、あるものは千年王国思想として、あるものは暴力行為を肯定する革命思想としても発展していった。

ガンディーは独立運動を指導していく中で、徐々に自身の自治の理想が多くの農民に理解され得ないこと、また自分自身もその理想を完全に達成し得ないことを看取するようになっていった。これに伴って、ガンディーは自身の理想を農民たちが字義的に理解する必要はなく、彼らが独自の仕方でも多様なネーションを想像していくことを許容するようになっていった。このように、独立運動期の民族統合はガンディーと農民の「統治」の理想をめぐるずれを内包しながらも、なおも緩やかなまとまりを持つ政治的集合体として機能していた点に特徴付けられるものであった。

5. 現代インド政治と支配の正統性（近藤則夫）

一般的に、近代的な政治体制の支配の正統性の源泉とは、人々が権力を自発的に授受する状況であると考えられる。選挙や他の政治過程への参加がその自発的授受の現れとすると、選挙の投票率などを見れば現代インドで支配の正統性はかなり高いレベルにあると言ってよい。しかし、正統性の在り方は、時代、状況によって変化しており、より細かくその様相をみる必要がある。

時代的には独立時、民族運動を率いた国民会議派が広範な人々の支持を集め、国家運営の正統性を人々の間で認められたといえる。しかし、1960年代までに経済政策の失敗など失敗により、次第にその正統性を失った。それに対して投票率などに示されるように選挙制度への参加は上昇し、中心的政党の正統性の低下を補うように選挙民主主義制度の正統性は定着していったといえる。

一方、現代インドの正統性の源泉をその多様性も含めてより詳細に分析する場合、正統性を代表する指標が重要になるが、人々の自発的授受が重要であるとする、政治体制の各要素に対する信頼感がその指標になりうる。これを手がかりとして複雑な正統性の状況を見る。

2005年の大規模な世論調査では主要機関への人々の信頼感が調査されており、それによると軍、選挙委員会、中央政府などへの信頼感是非常に高く、逆に政党、警察などの信頼感是非常に低い。軍を除いて考えると、選挙委員会、中央政府等への信頼感が高いことは、人々の間で選挙制度など民主主義体制の根幹に対する正統性が高いことを意味する。それに対して政党への信頼感が低いということは、一見矛盾にも見える。

しかし、政党は選挙で人々の審判を仰ぎ民主主義プロセスの中で定期的に取り替えることができる部分であり、人々は選挙制度と政党を分けて評価しているからであると考えられる。その上で様々な問題を解決できない政党を低く評価しているのである。従って政党の正統性が低いことは通常、制度の正統性に決定的ダメージを与えることはない。

インド民主主義体制では、政治体制の各要素の信頼感、正統性がこのように複合的に連結された状況があり、それが体制全体に対する正統性認識を左右しているといえる。しからば、その全体的認識であるが、投票率などの指標を見る限り、正統性認識は一定の高いレベルにあるといえる。これが今日の人々の間でのインドの正統性認識の状況と言えよう。

最後に以上の議論には限界がある点も述べる必要がある。端的な具体例は紛争地域であるムスリム多住地域のカシミールである。世論調査で見るとこの地域の人々はインド国家の主権がこの地域におよぶことの正統性を認めていない。このような地域の存在によってインド国家の支配の正統性は限界が課せられていると見るべきであろう。

6. 経済成長と社会政策：政権の正統化と貧困対策（内川秀二）

インドにおいては独立運動の中で独立後の経済体制についての構想が議論されていた。その中で重要産業については国営企業が中心となっていくこと土地改革の方向が定まった。1956年から始まる第2次5カ年計画では社会主義型社会が掲げられ国営企業中心の輸入代替工業化が開始された。経済成長を目指すことが民間企業の活動を制約することを正統化した。一方、土地改革は実施されたものの、土地所有の基本構造を変えるものではなかった。圧倒的な政治力を持っていた地主勢力は大胆な土地改革を許さなかった。政策の理念があっても、実施に際しては既存の政治勢力によって政策の選択の余地は狭められる。



近藤剛夫 先生



内川秀二 先生

1965年と66年と2年続きの干ばつにより食糧を緊急輸入しなければならなくなった。干ばつの影響によって経済が混乱するとともに、政治面でも国民会議派内の対立が表面化した。そこで、インディラ・ガンディーは1971年の総選挙に際して貧困追放というスローガンを掲げた。貧困問題という根本的な問題に対応するスタンスを示して膨大な票田である貧困層からの支持を取り付けた。

1970年代に入ると東アジア諸国が輸出志向工業化によって高い成長率を維持している一方で、インドの経済成長率は一向に上昇しなかった。その中で独立時の理念であった政府の介入が高成長につながるという考え方が問われることになった。その結果、1980年代には漸進的な自由化が進んだ。経済改革の直接のきっかけは、IMFからの借入時に課された条件であったが、政府主導の輸入代替工業化の限界は明らかになっていた。

インド経済が経済成長を続ける中で、農村部においても生活水準の向上が見られた。しかし、この成長の恩恵に預かっていない層には彼らの「貧困」を認識させることになった。政府も対策を打ち出した。2005年には全国農村雇用保障法が成立した。この法律は農村部の各世帯のうち最低1人に対して最低賃金で毎年100日以上雇用を保障する。この計画が実施されると、農業労働者の交渉力を高め、賃金の上昇につながる。この法案が国会を通過したことは、農村部でも地主と小作および農業労働者の力関係が徐々に変化してきたことを反映している。

2014年の総選挙で圧勝し、「インドの投資環境を向上させる」と華々しく登場したモディ政権も政策を選択できる余地は大きくなかった。前政権の全国農村雇用保障制度を継続せざるをえなかった。モディ首相は工業団地造成の迅速化を図るために農民に有利だとされる土地収用法の改正を試みた。しかし、この改正案は野党の反対により国会で承認されなかった。この背後には改正案は農民とりわけ小規模な農民の権利を犠牲にしているという反対意見があった。

インドにおいて政策は政策理念、政権の正統化、既存の政治勢力によって制約されるため、選択の余地は小さい。

7. 太田信宏コメント

支配権力の正統性を考えることは、支配権力を自発的に受け入れて正統とみなすのは誰か、支配権力は誰の目に正統な存在として映りたいのかという問いを含む。近代以前の時代を対象にこの問題を考える際、注意しなければならないのは、第一に、支配権力は単一の主体によって独り占めされるものではなく、上位・下位の権力者、さらには、宗教的権威によって分かち持たれるもの、相互に認め合うものであったという点である。第二に、権力を受け入れる側の人々は、「国民」のような一体性をもたないし、一体性をもつと想定されてもいなかった。さらに、インドに特徴的な条件として、絶対的な王権モデルの不在がある。こうした状況の中で、支配権力が自らを正統化するための戦略は、訴求対象（生産者、宗教的権威、上位・同輩の支配者等）という点でも、内容（社会経済的な便益の供用、宗教的儀礼・慈善、武勇、血統・出自等）という点でも本来的に多様で多元的なものとなり、歴史的状況に応じて柔軟に戦略が選ばれることになる。正統化の試みは、支配権力を取り巻く全体的な社会・文化のあり方を反映するとともに、そうした試みが社会・文化の変容を惹き起こしたことも想定される。ぶつかり合うさまざまな文化的、社会的な力



太田信宏先生

が働く場の中で獲得されなければならない正統性は、誰もが追い求めつつ完全には掴み取れない「曇り空」のようなものであったのかもしれない。

8. 田辺明生コメント

インド史における a)正統性の源泉と b)政治システムの特徴の変遷を、諸報告に即してまとめるならば、インダス文明期は a)交換、b)多様性を反映する多中心的ネットワーク、ヴェーダ期は a)儀礼、b)超越的権威と世俗的権力の結びつき、中近世は a)言説、b)複数の超越的権威と多様な世俗世界の媒介、民族運動期は a)運動、b)多様な人々のゆるやかなまとまり、独立後は a) 選挙・政策、b)多様かつ複合的な政治構造、となる。歴史のなかで、支配構造はより多元的・複合的になり、支配の正統化の試みもより多元的・複合的になった。同時に、社会側の政治的オプションも増加し、人々は、集団形成や関係構築のあり方について、複数の戦略可能性をもつようになった。こうして、支配の正統性をめぐるポリティクスは、より複雑なダイナミズムを帯びるようになってきたといえよう。ここでは、差異への働きかけこそが、インド的な政治の特徴であるといえるのではなかろうか。支配の正統性をめぐるポリティクスは、社会に存在するさまざまな差異—カースト、宗教、階層、言語など—に働きかけることによって成立してきた。すなわち、差異によって分断したり（させたり）、差異を越えて連帯したり（させたり）をつうじてである。近現代インドの正統性のありかたは、伝統的支配からカリスマ的支配そして合法的支配へと世俗合理化とともに進んできたというよりも、伝統・カリスマ・合法といったさまざまな要素が政治の場に蓄積し、支配の正統性をめぐるポリティクスの場をより多元的・複合的にしている。その結果、現代インド政治においては、「いかに正統性は確保されるのか」に一定の答えがあるのではなく、むしろこの問いをめぐって政治過程が展開するのだ、といえよう。



田辺明生 先生

9. 加藤篤史コメント

一つ目のコメントは、権力者は誰から正統性を得ようとするかという疑問である。Selectorate 理論がヒントを与えてくれるように思われる。政治経済学の Selectorate 理論では、権力者の地位の獲得・維持に影響力を行使しうる人々の集合を selectorate と呼ぶ。そして、権力者は政策の選択によって、selectorate の中の部分集合として権力者の地位を獲得・維持するために必要な勝利連合を形成して彼らの支持を得ようとする主張する。厳密には支持＝正統性の付与ではないが、権力者が正統性を得ようとする相手は、勝利連合のメンバーと重なる人々が多いと思われる。今回の発表者のご報告の中でもそれぞれの時代の権力者は自らの勝利連合のメンバーから正統性を獲得することを目指してそれぞれにとって適切な戦略をとっていたと考えることができるのではないだろうか。二つ目のコメントは、インド国内の州間での経済的成果や人間開発指数における大きな格差についてである。上位カーストが支配力を保持してきた州ではどちらの基準で見ても成果は低く、下層カーストの政治参加が進んでいる州では人間開発指数の成果が高い。一



加藤篤史 先生

つ目のコメントとかかわるが、このような格差は各州の権力者が誰を勝利連合のメンバーとみなして政策を決定しているかに依存しているのではないかと推測することができる。

当日のシンポは 87 名の参加者を迎え、大変盛況なものとなった。参加者からは、多くの質問やコメントがあり、活発な討論が行われた。

最後に、シンポジウムの企画と実施にあたっては、シンポジウム企画委員（内川秀二、加藤篤史、小西公大、田辺明生、間永次郎、三田昌彦）の各氏、また報告者・討論者・司会・タイムキーパーを務めてくださったシンポジストのみなさまに、当日はもちろんのこと、事前の企画会議や打ち合わせ会議そしてメールでのやりとりなどで大変なご尽力をいただいた。またシンポジウムの準備と運営については、池田千湖氏（東京大学グローバル地域研究機構南アジア研究センター 学術支援職員）、大庭里枝氏（東京大学大学院総合文化研究科学術支援職員）、関戸一平氏が、周到かつ的確な仕事ぶりで見事にこなしてくださった。ここに記して深い謝意を示したい。



小西公大 先生



（文責：田辺明生（各報告・コメントの要旨は本人による）、2018年5月29日）